



# 編み込み模様



栞

勿忘草（わすれなぐさ）が枯れた。肥えた土に黒蟻が這う。

小さな羽をぐうんと伸ばして雀が首を傾げた。その瞳に映る、おさない種。

唇を尖らせて、少し外れた軽い口笛。あまいパンケーキの匂いが、喫茶店から。耳に入る音楽に、からからとした子らの声。鮮やかな空に、人々のくっきりとした影。

紅葉なんて忘れてしまう。真っ青な昼下がりに。

網戸の傍でカーテンが揺らぐ。開いたままの窓枠の向こうに世界は色を灯し始め、駆け足で空は太陽のあつさを目一杯肺に取り込んだ。薄い雲に光は通り半透明のあか。地球がくるり。と回り、また朝はわたしたちを撫でる。ハロー、世界。恣意的に決められた、だのに美しい今日よ。

少年のような自尊心が突然牙を剥いて舌に乗った。一体何を言ったのか、詳細は覚えていない。ただ、そのとき喉につきつけられたのは、彼女の掠れたマスカラと、薬指に震えていた思いでの指輪だった。

心地よい倦怠感に身を任せては、ぼんやりとした頭で怠惰に思い出をなぞってみる。春の匂いがしシャツは遠くへ押しやられ、鼻腔に残っていたのは微かな紅葉の影一つ。

腹を満たした土が吐き出した雨の匂いは地上を這いまわり、ずうんと音をたてた。つまさきに枯れた彼岸花。燃え尽きたのは、花びらか、私か。星のまたたきが一つ、消えた。

小さな変化は目に見えなくて、弾かれる鍵盤のように段々に旋律を生み、いつしか巨大な影となって襲いかかってくるのだ。怠惰がそれを造り上げたのか、時間がそうさせたのかは定かではない。ただただ結果だけが己の懷に忍び込み、目蓋を開かせようと必死になる。

雨は酷く土をぬかるませ、甘い匂いが靴の間を泳ぐ。横切る人々の顔に見るのは、細い瞳が目尻に皺を寄せる様子で。  
ズボンの裾が重たくなって、足を止めた。明日には、月は、出るだろうか。

ひとつ皮をへだてて、ふれていた体温。その指さきのぬくもりだけで、宇宙がみえていたのに。やさしいほほえみが、  
そらへ拡散して。

苦い蜜であることを承知の上でうすら開く彼女の唇に口づけをした。触れた髪からは柔らかな匂いがし、まるで自分は蜂のようだと気づく。黄と黒の危険信号を発していたのは彼女であるのだが、これはただの責任転嫁。責任。そんなものはない。惚れた腫れたにあるのは醜く純粋な欲望のみ

「これは葉緑体」と手の甲の太いあおを差し出した。驚いた猫のように目を丸くした彼は頬を上気させ興奮気味に歯を覗かせる。「酸素をうめるんだね」。微笑ましい反応にうむのではないよ、と僕は首を横に振った。「もっとひかりを」立つ鳥の、さいごの、もてなしなのだ、と。

かすれたインクの匂いが唇を撫でる。あまい言葉が積み重なった図書館に、くっきりと残る木々の歴史。蔵書一枚にキスマークを残して。

萌え出たちいさな葉が、太陽を目指す。たくさんの養分を吸って、息をして。背を伸ばした先に、幼い栄光。

随分と自転車の滑りが良くなった。夜道をさあさあと音を立て回る車輪。そして道が舗装されたのだと気がつく。切なくて苦笑してしまうのだ。昔、でこぼこの道に溜まった水を蹴って遊んだことを思い出して。

艶やかな月は濡れて、鏡の心はほのり紺色。首筋を過ぎる風に熱はなく、するするとほどけるように流れて往く。冷える体を戒めるように、裾をきゅうと握り締めて。

ひんやりとした壁に頬を寄せた。汗ばんだ額に、優しい感触。指先が触れるコンクリートは、薄汚れていて、うっすらとした灰色に映っている。

睫毛が濡れている。肩に貼りついた服はひちて、透明。低い雲から流される涙が、わたしたちの泥をあらいおとして、ゆく。

泳いだ先に夢があって、夢の先に、今が在った。

鮮やかな緑が瞳に映り込んで、不思議な感覚。手を振って、げんじつを確かめる。

かがみにうつったあなたは誰。こっぷにうつったあなたは誰。みずたまりにうつったあなたは誰。

声をあげてみる、一つところから響く音。  
頬をつねってみる、一つところからの痛み。

じいっと覗いてみた、目が合う。その境にいるのが、わたしなんじゃないのかしら。  
馬鹿を考えて苦笑した。

きれい、きれい、といしきする。  
その間には、胸が煌々と燃えている。

するり、するり、とぬけてゆく。  
そのときには、もう、炎はきえていて。

あいとおなじね、と彼女はいった。

紅葉がはらりと爪先を掠って。さらさらと泳ぐ私に、焦げた雪のように見えた。耳がつめたく、呼吸をしている。

みずたまりに足指を落として、あまい波紋がまあるく混ざった。肩を冷やす秋風に鈴虫が歌い出すほどよい時間。髪に、あなたの匂いを残したまま、わたしは息を吸い込んで、留めた。

あまいにおいだと、おもった。髪から零れる一滴が、薄手のボロに歪な滲（し）みをつくる。上気した頬はうすら血の色を呈し、いかにも体に悪そうな紅い彼女の唇が孤を描く。両腕に抱えた肩と背は華奢。濡れた頭に鼻を押し付けた。あまいにおい。彼女はまるで、蜜。

甘い滴ほろほろ。頬を跳ねかえるしろがねの声。猫の濡れた瞳を見つめながら。天（あま）の滴ぽろぽろ。

枕を抱いて眠りにつくとき、肩口に彼女のリップグロスの朱が見えた。背に感じる彼女の乳房は穏やかに上下し、ぼくの首に細い腕が絡まる。なんという、怠惰。